

大阪市立
自然科学
博物館
蔵書之印

Vol. 1

No. 2

April . 1 9 7 0

BEETLES

びい と る ず

大阪甲虫同好会

20854



目 次

○ 灯火に飛来した岩湧山の甲虫類について - 2 -

V. 調査資料の報告と解説

(2) コガシラミズムシ科	2
(3) ゲンゴロウ科	2
(4) ミズスマシ科	2
(5) ガムシ科	2
(6) ムクゲキノコムシ科	7
(7) タマキノコムシ科	7
(8) シテムシ科	8
(9) アリヅカムシ科	8
(10) ハネカクシ科	9
(11) クワガタムシ科	15
(12) コガネムシ科	15
(13) マルハナノミ科	20
(14) ナガドロムシ科	20
(15) ドムシ科	20
(16) ヒメドロムシ科	21
○ クリを加害するコガネムシ類の発生状況	22
○ ゴミムシダマシの新しい分布資料(1)	26
○ 編 集 後 記	27

灯火に飛来した岩湧山の甲虫類について— 2 —

木村裕、林靖彦、野村英世、
伊藤建夫、小林卓、今井義則、
仁科成行

V 調査資料の報告と解説

(2) コガシラミズムシ科 Haliplidae

種の同定は佐藤正孝氏にお願いした。

1. *Peltodytes intermedius* SHARP, コガシラミズムシ

(3) ゲンゴロウ科 Dytiscidae

種の同定は佐藤正孝氏にお願いした。

1. *Guignotus japonicus* SHARP, チビゲンゴロウ
2. *Laccophilus difficilis* SHARP, ツブゲンゴロウ
3. *Laccophilus lewisius* SHARP, タテナミツブゲンゴロウ
4. *Platambus pictipennis* SHARP, モンキマメゲンゴロウ
5. *Rhantus pulverosus* STEPHENS, ヒメゲンゴロウ
6. *Hydaticus bowringi* CLARK, シマゲンゴロウ
7. *Hydaticus grammicus* GERMAR, コシマゲンゴロウ

(4) ミズスマシ科 Gyrinidae

種の同定は佐藤正孝氏にお願いした。

1. *Gyrinus japonicus* SHARP, ミズスマシ
2. *Gyrinus gestroi* REGIMBART, ヒメミズスマシ

(5) ガムシ科 Hydrophilidae

種の同定は佐藤正孝氏にお願いした。

1. *Cercyon quisquilius* LINNE, キバネケシガムシ
2. *Cercyon olibrus* SHARP, アカケシガムシ
3. *Cercyon setulosus* SHARP,
4. *Oosternum sorex* SHARP, ホソケシガムシ
5. *Cryptopleurum subtile* SHARP, セマルケシガムシ
6. *Laccobius bedeli* SHARP, シジミガムシ
7. *Helochares lewisius* SHARP, ルイスヒラタケシガムシ
8. *Enochrus simulans* SHARP, キイロヒラタケシガムシ
9. *Sternolophus rufipes* FABRICIUS, ヒメガムシ
10. *Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY, ガムシ
11. *Hydrophilus affinis* SHARP, コガムシ
12. *Berosus lewisius* SHARP, トゲバゴマフガムシ
13. *Regimbartia profunda* SHARP, マメガムシ

(2) コガシラミズムシ科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1	コガシラミズムシ											1		1

(3) ゲンゴロウ科

1	チビゲンゴロウ						1	3		31	8			43
2	ツブゲンゴロウ			1				1						2
3	タテナミツブゲンゴロウ										1			1
4	モンキマメゲンゴロウ							10	1					11
5	ヒメゲンゴロウ							2				1		3
6	シマゲンゴロウ			1				1						2
7	コシマゲンゴロウ			1				2			2	4	14	23

(4) ミズスマシ科

1	ミズスマシ						1	3	1		2	1		8
2	ヒメミズスマシ						1							1

(5) ガムシ科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1	キバネケシガムシ						7	35			1			43
2	アカケシガムシ						16	138			1		18	173
3	<i>C. setulosus</i>						10	1						11
4	ホソケシガムシ									1				1
5	セマルケシガムシ						2	9	2	3	20	2	4	42
6	シジミガムシ						2	53						55
7	ルイスヒラタガムシ			1										1
8	キイロヒラタガムシ										1	4		5
9	ヒメガムシ							2				15	11	28
10	ガムシ											1		1
11	コガムシ							1						1
12	トゲバゴマフガムシ			2			508	71		2	6	5		594
13	マメガムシ							4						4

ゲンゴロウ科 飛来個体数（種類数）の季節的変化と時間帯

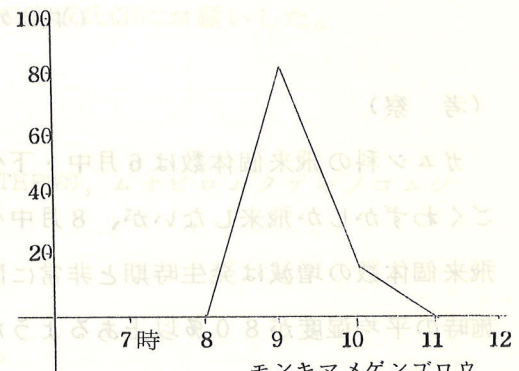
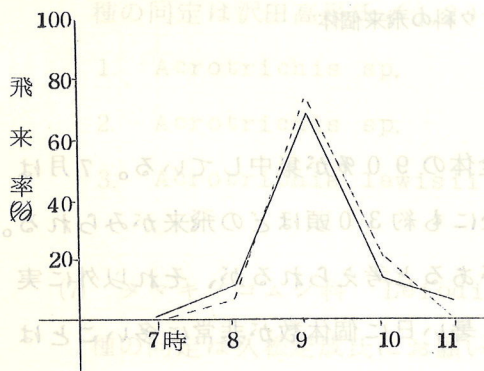
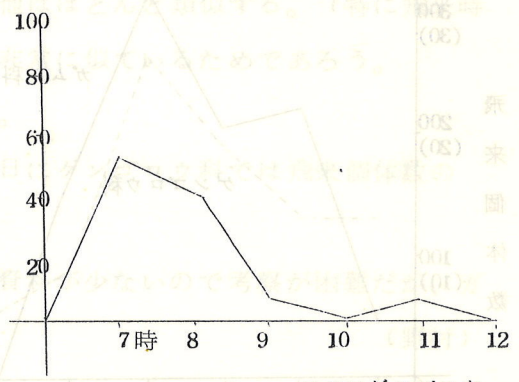
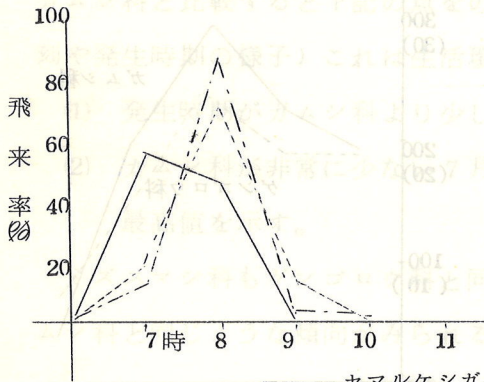
月日 時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	10	13
8	0	0	2	0	0	0	3	0	1	2	3	2	13
9	0	0	1	0	0	0	14	0	0	3	0	1	19
10	—	0	0	0	0	1	2	1	19	3	0	0	26
11	—	0	0	—	0	0	0	0	6	2	0	1	9
12	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—	5
計	0	0	3 (3)	0	0	1 (1)	19 (6)	1 (1)	31 (1)	11 (3)	5 (2)	14 (1)	85 (7)

ガムシ科 飛来個体数（種類数）の季節的変化と時間帯

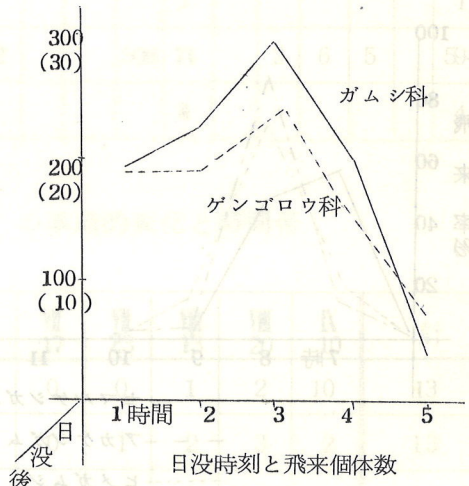
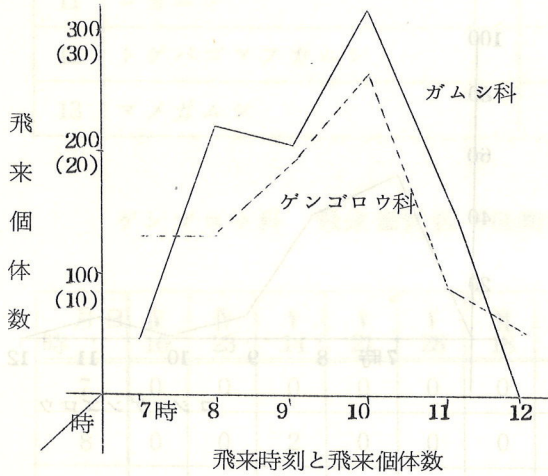
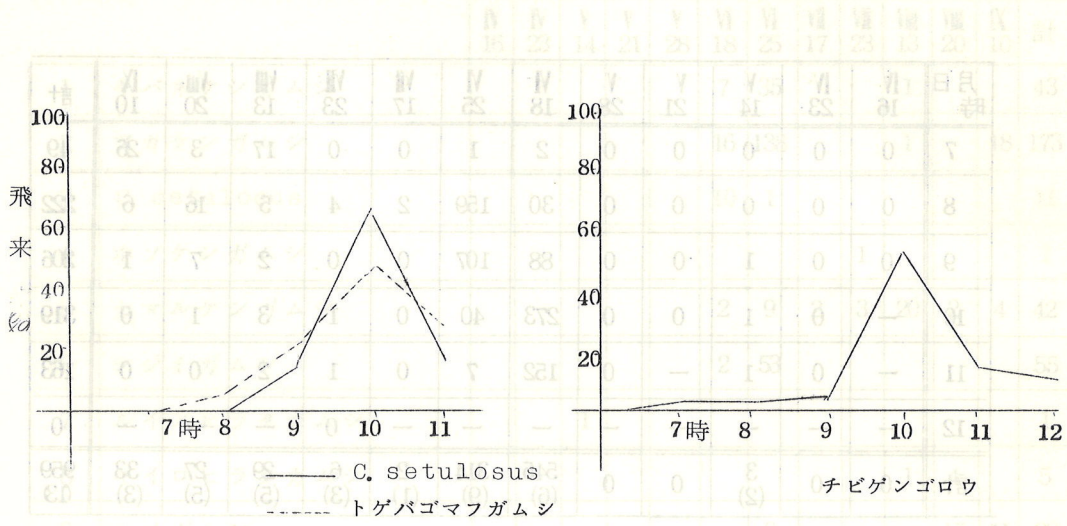
月日時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	0	0	0	0	2	1	0	0	17	3	26	49
8	0	0	0	0	0	30	159	2	4	5	16	6	222
9	0	0	1	0	0	88	107	0	0	2	7	1	206
10	—	0	1	0	0	273	40	0	1	3	1	0	319
11	—	0	1	—	0	152	7	0	1	2	0	0	163
12	—	—	—	—	—	—	—	—	0	—	—	—	0
計	0	0	3 (2)	0	0	545 (6)	314 (9)	2 (1)	6 (3)	29 (5)	27 (5)	33 (3)	959 113

ガムシ科の飛来時刻

ゲンゴロウ科の飛来時刻



(5) ガムシ科の飛来時刻と飛来個体数 (7月) (7月) 及び日没時刻と飛来個体数



()内はゲンゴロウ科の飛来個体

(考 察)

ガムシ科の飛来個体数は6月中・下旬に全体の90%が集中している。7月はごくわずかししか飛来しないが、8月中旬以後にも約30頭ほどの飛来がみられる。飛来個体数の増減は発生時期と非常に関係があると考えられるが、それ以外に実施時の平均湿度が80%以上あるような蒸し暑い日に個体数が非常に多いことは

気象条件にもある程度左右されると思われる。次に種類別にみると、春期のみ
 に出現する種はルイスヒラタガムシ、初夏のみ出現する種はキバネケシガムシ・
C. setulosus・シジミガムシなどで、アカケシガムシ・セマルケシガムシ・
 トゲバゴマフガムシは初夏から秋まで長期間にわたり多数飛来している。また
 大形のガムシ類（ガムシ・コガムシ）が少ないのは調査地付近に大きな池や沼
 がないためであろう。

さらにガムシ科の飛来時刻を調べると、セマルケシガムシ・アカケシガムシ・
 ヒメガムシは日没後から2時間以内に、シジミガムシ・キバネケシガムシは日
 没1時間後から3時間後に、*C. setulosus*・トゲバゴマフガムシは日没2時
 間後から4時間後に各々総飛来個体数の80%以上が飛来している。このよう
 に種によつて飛来時刻が異なっていることは非常に興味深い。

ゲンゴロウ科では飛来個体数が少ないので考察するほど十分な資料はないが、
 ガムシ科と比較すると下記の点をのぞき他はほとんど類似する。（特に飛来時
 刻や発生時期の様子）これは生活環境が非常に似ているためであろう。

- (1) 発生時期がガムシ科より少し遅い。
- (2) ガムシ科が非常に少ない7月23日にゲンゴロウ科では飛来個体数の
 最高値を示す。

ミズスマシ科もゲンゴロウ科と同様に資料が少ないので考察が困難だが、ガ
 ムシ科と同じような傾向がみられる。（野村）

(6) ムクゲキノコムシ科 Ptiliidae

種の同定は沢田高平氏(1,2)、久松定成氏(3)にお願いした。

1.	<i>Acrotrichis</i> sp.		
2.	<i>Acrotrichis</i> sp.		
3.	<i>Acrotrichis lewisii</i> MATTHEWS,	ムナビロムクゲキノコムシ	

(7) タマキノコムシ科 Leiodidae

種の同定は久松定成氏にお願いした。

1. *Colenis* sp.

2. *Cyrtusa japonica* CHAMPION, チビタマキノコムシ

(8) シテムシ科 *Silphidae*

これらの種は我々で同定した。

1. *Necrodes asiaticus* PORTEVIN, オオモモブトシテムシ

2. *Nicrophorus quadripunctatus* KRAATZ, ヨツボシモンシテムシ

3. *Nicrophorus maculifrons* KRAATZ, マエモンシテムシ

(9) アリヅカムシ科 *Pselaphidae*

種の同定及び解説は沢田高平氏にお願いした。

1. *Triomicrus protervus* SHARP, マルムネアリヅカムシ

2. *Trissemus alienus* SHARP, ナミエンマアリヅカムシ

3. *Trissemus* sp.

JEANNEL 氏 (1949, P. 324) によると、*Trissemus* 属に位置すべきものであるが、雄生殖器は一對の突起を具え、さらに側片がない。

そのほか口器について *T. alienus* SHARP と比較すると、相当な違いが認められる。いづれにしても既知種にない特徴が見られる。

4. *Poroderus medius* SHARP, クシヒゲアリヅカムシ

(6) ムクゲキノコムシ科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1	<i>Acrotrichis</i> sp.									1				1
2	<i>Acrotrichis</i> sp.										2			2
3	ムナビロムクゲキノコムシ								1	1				2

(7) タマキノコムシ科

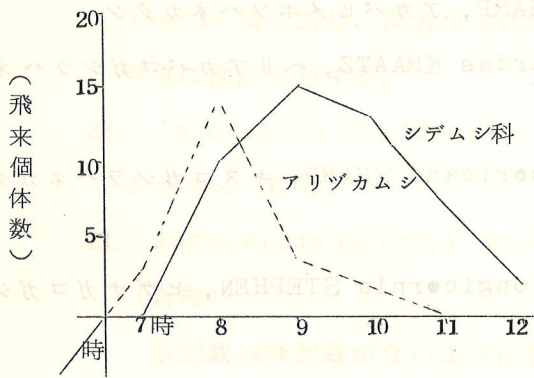
1	<i>Colenis</i> sp.										1			1
2	チビタマキノコムシ						1	2				1		4

(8) シデムシ科

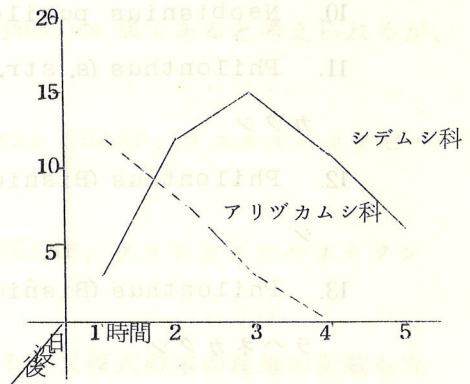
	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1			1			2	2	2	4	16	2	13	42
2					1		1	1					3
3							2						2

(9) アリヅカムシ科

1	マルムネアリヅカムシ						8						8
2	ナミエンマアリヅカムシ						3	2	6				11
3	Trissemus sp.					1	2						3
4	クシヒゲアリヅカムシ						1						1



飛来時刻と飛来個体数



日没時刻と飛来個体数

(考察)

上記の4科はいずれもデータが少なく考察できないが、アリヅカムシ科の飛来時刻は後述のハネカクシ科に酷似する。

(10) ハネカクシ科 Staphylinidae

種の同定及び解説は林靖彦・伊藤建夫による。

1. Anthobium sp, ?

所属には誤りはないと思うが、頭、胸部を欠くため、種の決定は出

来なかつた。

18	7	01	2.	<i>Carpelimus</i> (s. str.) <i>vagus</i> SHARP, ニセユミセミゾハネカクシ	
8	8		3.	<i>Carpelimus</i> (s. str.) sp.	1
8			4.	<i>Carpelimus</i> (s. str.) sp.	8
8			5.	<i>Oxytelus</i> (s. str.) <i>ferugineus</i> KRAATZ, コゲチヤセスジハネ クシ (新称)	

8			6.	<i>Paederus fuscipes</i> CURTIS, アオバアリガタハネカクシ	
11			7.	<i>Lithocharis nigriceps</i> KRAATZ, クロズトガリハネカクシ	
8			8.	<i>Achenomorphus lithocharoides</i> SHARP, クロニセトガリハネカ クシ	
1			9.	<i>Isocheilus staphylinoides</i> KRAATZ, ニセトガリハネカクシ	
			10.	<i>Neobisnius pumilus</i> SHARP, アカバヒメホソハネカクシ	
			11.	<i>Philonthus</i> (s. str.) <i>tardus</i> KRAATZ, ヘリアカバコガシラハネ カクシ	
			12.	<i>Philonthus</i> (<i>Bisnius</i>) <i>sericans</i> SHARP, キヌコガシラハネカク シ	
			13.	<i>Philonthus</i> (<i>Bisnius</i>) <i>longicornis</i> STEPHEN, ヒゲナガコガシ ラハネカクシ	
			14.	<i>Philonthus</i> (<i>Bisnius</i>) <i>lewisius</i> SHARP, ドウガネコガシラハネ カクシ	

従来 *P. aeneipennis* BOHEMANN の synonym として扱われることが多かつたが、独立種と考えられる。近似種が数種あり、今後の検討を要する。

1			15.	<i>Philonthus</i> (<i>Bisnius</i>) <i>sulcifrons</i> SHARP, ミズズコガシラハネ カクシ	
1			16.	<i>Ontholestes gracilis</i> SHARP, サビハネカクシ	
1			17.	<i>Eucibdelus japonicus</i> SHARP, ハイイロハネカクシ	
1			18.	<i>Quedius</i> (<i>Microsaurus</i>) <i>simulans</i> SHARP, クロツヤムネハネカ	

クシ (新称)

19. *Sepedophilus germanus* SHARP, ムクゲヒメキノコハネカクシ

20. *Falagria concinna* ERICHSON, アメイロセミゾハネカクシ

今まで本種として扱われてきた邦産種には2つの系列が含まれているように思われる。その2つのいずれの系列にもそれぞれ酷似する若干の型が含まれているので、現在正確な種名の決定は困難である。

21. *Myrmecocephalus sapida* SHARP, キバネセミゾハネカクシ

かつて日本の *Falagria* 属として扱われてきた種類は、*Falagria* 属から *Myrmecocephalus* 属の分離とともに、各々の種の所属が混乱しているようである。これらの種類は頭部及び前胸背の表面に光沢のある一群と光沢のない一群（顆粒状の微細構造による）に分かれ、前者が *Falagria* 属であり、後者が *Myrmecocephalus* 属であると考えられるが、早急に検討を要する。

22. *Ischnopoda (Phylhygra) distans* SHARP, ウスチャバネチビハネカクシ (新称)

23. *Ischnopoda (s. str.) vivida* SHARP, ウスアカチビハネカクシ (新称)

原記載以降記録がないように思われる。又模式標本の産地の記載もないので、本邦に産することを再確認するとともに、これが本州からの最初の記録であろう。触角及び腹部の色の変化はかなり大きいので、より多くの個体を比較検討しなければならない。

24. *Ischnopoda* sp.

25. *Ischnopoda* ? sp.

26. *Myrmedoniae* gen. sp.

Tetrabothrus 属もしくはその近縁属と思われる。

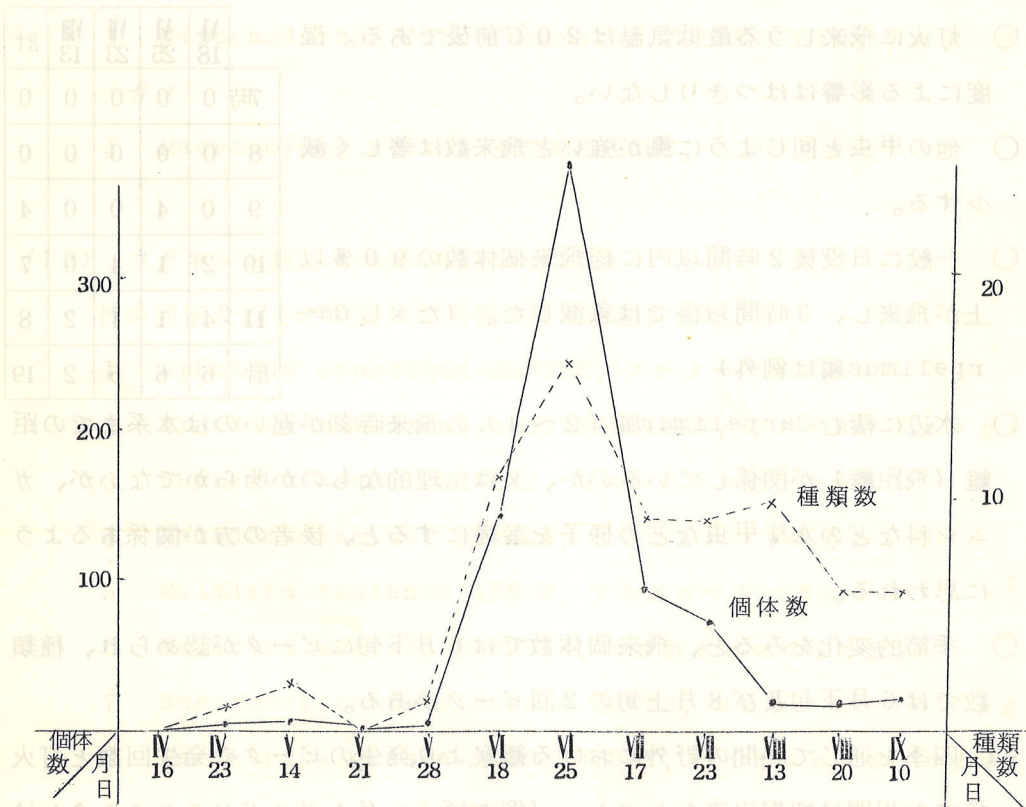
(10) ハネカクシ科

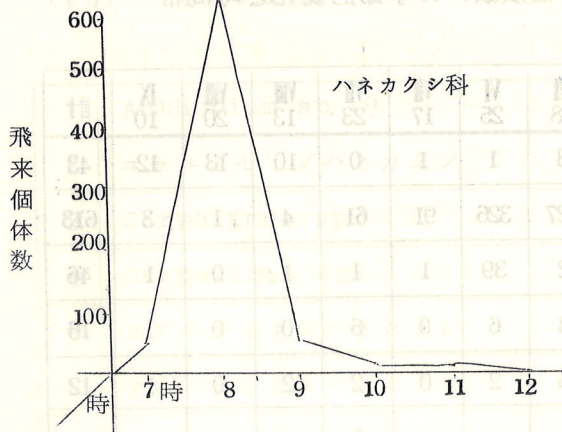
		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1	Anthobium sp. ?		1											1
2	ニセユミセミゾハネカクシ						6	3		2	2			13
3	Carpelimus sp.							1						1
4	Carpelimus sp.							2		3				5
5	コゲチヤセスジハネカクシ						1			1	1		3	6
6	アオバアリガタハネカクシ							7						7
7	クロズトガリハネカクシ						1	4	1	1	1	2	2	12
8	クロニセトガリハネカクシ			1										1
9	ニセトガリハネカクシ						1				1			2
10	アカバヒメホソハネカクシ							1	1			1		3
11	ヘリアカバコガシラハネカクシ							1						1
12	キヌコガシラハネカクシ							13	26	2	2	1		44
13	ヒゲナガコガシラハネカクシ						109	284	37	11	5	5	3	454
14	ドウガネコガシラハネカクシ							43	17	48		4	1	113
15	ミゾズコガシラハネカクシ									1			1	2
16	サビハネカクシ										1			1
17	ハイイロハネカクシ							2	7	3				12
18	クロツヤムネハネカクシ							1						1
19	ムクゲヒメキノコハネカクシ									1				1
20	アメイロセミゾハネカクシ							1			1			2
21	キバネセミゾハネカクシ							3	1			1		5
22	ウスチヤバネチビハネカクシ			1			11	2	3	1	1		8	27
23	ウスアカチビハネカクシ							3	3	4				10
24	Ischnopoda sp.							2	1				1	4
25	Ischnopoda ? sp.					1								1
26	Myrmedoniae gen. sp.										1			1

野外ハネカクシ科 飛来個体数（種類数）の季節的変化と時間帯

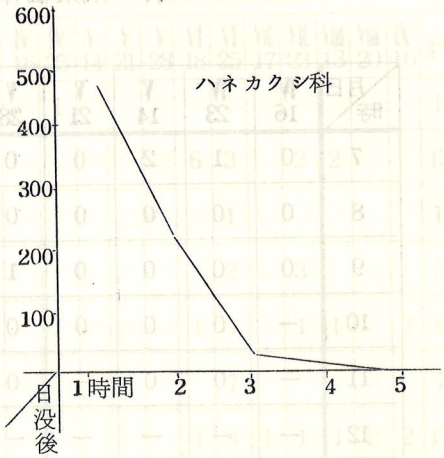
月日 時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	1	2	0	0	3	1	1	0	10	13	12	43
8	0	0	0	0	0	127	326	91	61	4	1	3	613
9	0	0	0	0	1	2	39	1	1	1	0	1	46
10	—	0	0	0	0	3	6	0	6	0	0	1	16
11	—	0	0	—	0	5	2	0	2	2	0	1	12
12	—	—	—	—	—	—	—	—	0	—	—	—	0
計	0	1 (1)	2 (2)	0	1 (1)	140 (11)	374 (16)	93 (9)	70 (9)	17 (10)	14 (6)	18 (6)	730 (26)

()内は種類数





飛来時刻と飛来個体数



日没時刻と飛来個体数

(考察)

- 灯火に飛来しうる最低気温は20℃前後である。湿度による影響ははっきりしない。
- 他の甲虫と同じように風が強いと飛来数は著しく減少する。
- 一般に日没後2時間以内に総飛来個体数の90%以上が飛来し、3時間以後では急減した。(ただし *Carpelimus* 属は例外)

Carpelimus-group
(2-4)の灯火に飛来する時刻

	VI 18	VI 25	VII 23	VIII 13	計
7時	0	0	0	0	0
8	0	0	0	0	0
9	0	4	0	0	4
10	2	1	4	0	7
11	4	1	1	2	8
計	6	6	5	2	19

- 水辺に棲む *Carpelimus* 属 (2~4) の飛来時刻が遅いのは水系までの距離(飛距離)が関係しているのか、又は生理的なものか明らかでないが、ガムシ科などの水棲甲虫などの様子を参考にすると、後者の方が関係あるように思われる。
- 季節的变化をみると、飛来個体数では6月下旬にピークが認められ、種類数では6月下旬及び8月上旬の2回ピークがある。
- 四季を通じて昼間の野外における観察より、発生ピークや発生回数と灯火飛来の相関は把握出来なかつた。(例えば、ヒゲナガコガシラハネカクシは

野外で常時見られる。

○ 灯火に飛来する個体数及び種類数のピークと年間を通じての発生回数、時期との相関は昼間の資料が不足しているため断言出来ない。しかし灯火への飛来状況は成虫出現期の目安となりうる。

○ これらの種の昼間の棲息環境（採集される環境）は種々雑多である。

Anthobium sp.・ハイイロハネカクシ・クロツヤハネカクシ等は主に葉上や花上に、Carpelimus属は水辺に、そしてその他は腐植質・畑・叢の中に見られる。（林・野村）

(11) クワガタムシ科 Lucanidae

クワガタムシ科は明らかな種なので我々で同定した。

1. *Lucanus maculifemoratus* MOTSCHULSKY, ミヤマクワガタ
2. *Prosopocoilus inclinatus* MOTSCHULSKY, ノコギリクワガタ
3. *Nipponodorcus rubrofemoratus* VOLLENHOVEN, アカアシクワガタ
4. *Macrodercus rectus* MOTSCHULSKY, コクワガタ

(12) コガネムシ科 Scarabaeidae

種の同定及びその解説は三宅義一氏にお願いした。

1. *Aphodius urostigma* HAROLD, フチクマグソコガネ
2. *Aphodius sublimbatus* MOTSCHULSKY, ウスイロマグソコガネ
3. *Rhyparus azumai* NAKANE, セスジカクマグソコガネ
4. *Maladera kamiyai* SAWADA, カミヤビロウドコガネ
5. *Maladera castanea* ARROW, アカビロウドコガネ
6. *Maladera secreta* BRENSKE, マルガタバロウドコガネ
7. *Gastroserica brevicornis* LEWIS, コヒゲンマビロウドコガネ
8. *Paraserica grisea* MOTSCHULSKY, ハイイロビロウドコガネ
9. *Serica similis* LEWIS, カバイロビロウドコガネ

10. *Sericania mimica* LEWIS, ナエドコチャイロコガネ

11. *Sericania* sp.

S. alternata~*S. miyakei* 群の種と考えられるが、雄に光沢があることで *S. matsushitai* に近似する。しかし雄交尾器の右側片に歯突起があること、前背板側縁が一様に彎局することなどで異なり、*S. alternata*, *S. miyakei* とは触角の片状節が4節で、次節が全く伸長せず、雄に光沢がある点で異なる。

12. *Lachnosterna kiotonensis* BRENSKE, クロコガネ

13. *Lachnosterna picea* WATERHOUSE, コクロコガネ

14. *Heptophylla picea* MOTSCHULSKY, ナガチャコガネ

15. *Allomyrina dichotoma* LINNE, カブトムシ

16. *Adoretus tenuimaculatus* WATERHOUSE, コイチャコガネ

17. *Mimela flavilabris* WATERHOUSE, ヒメスジコガネ

18. *Mimela difficilis* WATERHOUSE, ツヤスジコガネ

19. *Anomala costata* HOPE, オオスジコガネ

20. *Anomala testaceipes* MOTSCHULSKY, スジコガネ

21. *Anomala cuprea* HOPE, ドウガネブイブイ

22. *Anomala viridana* KOLBE, ヤマトアオドウガネ

23. *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY, ヒメコガネ

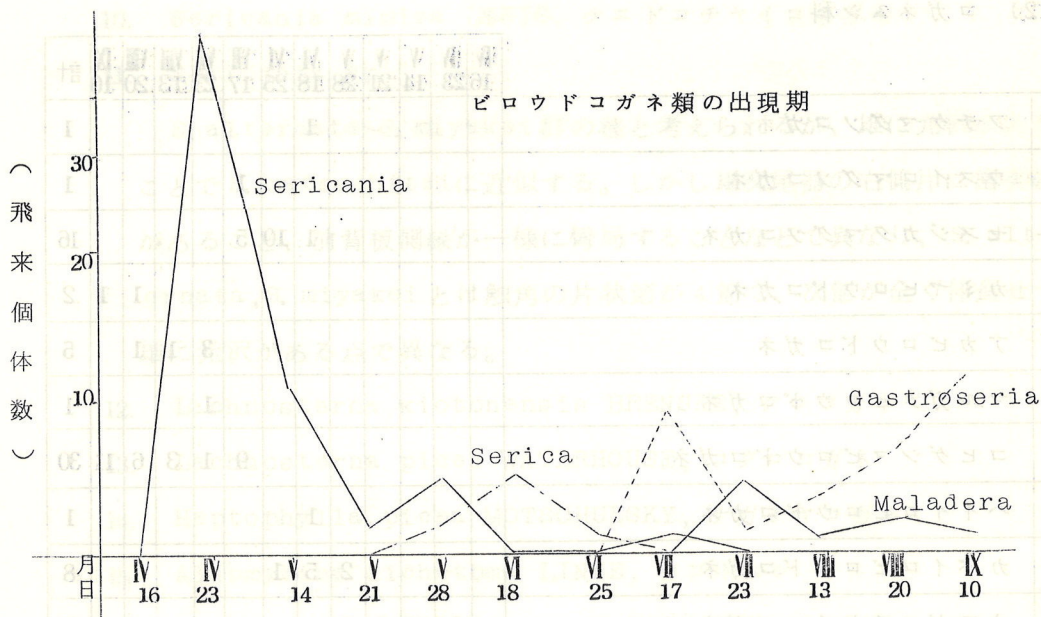
24. *Blitopertha orientalis* WATERHOUSE, セマダラコガネ

(11) クワガタムシ科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1	ミヤマクワガタ						1	2		2	2	3		10
2	ノコギリクワガタ							2			1	2	1	6
3	アカアシクワガタ								1					1
4	コクワガタ						5	2				2	3	12

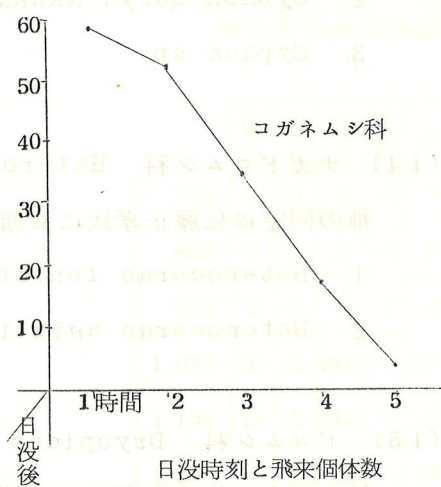
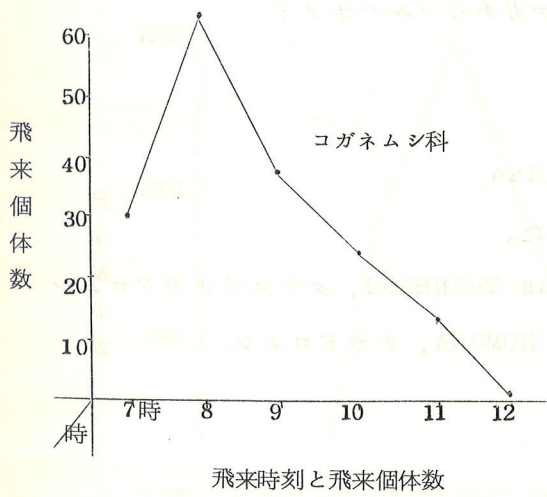
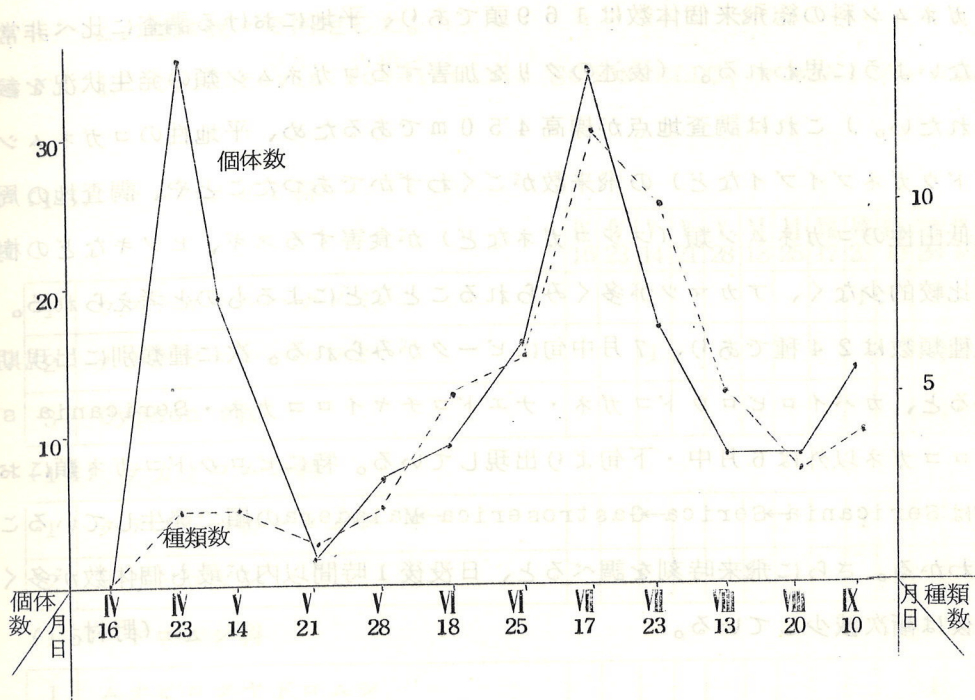
(12) コガネムシ科

	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1						1							1
2								1					1
3						1	10	5					16
4											1	1	2
5									3	1	1		5
6									1				1
7								9	1	3	6	11	30
8						1							1
9					2	5	1						8
10		34	11	2	5			1					53
11		1											1
12								1					1
13			8				1		2				11
14								8	2				10
15									1	1			2
16						1		1				1	3
17								3	3				6
18								2					2
19							1	1	1	2			5
20								1					1
21									2			1	3
22							1						1
23							2						2
24								1	1	1			3



月日時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	20 (1)	0	2 (1)	2 (2)	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	4 (1)	30
8	0	7 (1)	9 (2)	0	4 (2)	2 (2)	6 (4)	17 (8)	5 (4)	4 (3)	3 (2)	6 (4)	63
9	0	4 (2)	6 (2)	0	0	4 (3)	9 (3)	5 (5)	3 (1)	1 (1)	3 (2)	3 (1)	38
10	—	4 (1)	2 (1)	0	1 (1)	3 (2)	0	8 (4)	4 (3)	1 (1)	1 (1)	0	24
11	—	0	2 (2)	—	0	0	1 (1)	4 (3)	4 (4)	1 (1)	0	1 (1)	13
12	—	—	—	—	—	—	—	—	1 (1)	—	—	—	1
計	0	35 (2)	19 (2)	2 (1)	7 (2)	9 (5)	16 (6)	34 (12)	17 (10)	8 (5)	8 (3)	14 (4)	169 (24)

()内は種類数



(考 察)

コガネムシ科の総飛来個体数は169頭であり、平地における調査に比べ非常に少ないように思われる。(後述のクリを加害するコガネムシ類の発生状況を参照されたい。)これは調査地点が標高450mであるため、平地性のコガネムシ類(ドウガネブイブイなど)の飛来数のごくわずかであったことや、調査地の周辺は低山性のコガネムシ類(スジコガネなど)が食害するスギ、ヒノキなどの樹林が比較的少なく、アカマツが多くみられることなどによるものと考えられる。飛来種類数は24種であり、7月中旬にピークがみられる。次に種類別に出現期をみると、カバイロピロウドコガネ・ナエドコチャイロコガネ・*Sericania* sp. コクロコガネ以外は6月中・下旬より出現している。特にピロウドコガネ類においては*Sericania*→*Serica*→*Gastroserica*→*Maladera*の順で発生していることがわかる。さらに飛来時刻を調べると、日没後1時間以内が最も個体数が多く、その後は漸次減少している。(野村)

(13) マルハナノミ科 Helodidae

種の同定は佐藤正孝氏にお願いした。

1. *Cyphon intermedius* NAKANE, ウスチャマルハナノミ
2. *Cyphon seryu* NAKANE, ナガチビマルハナノミ
3. *Cyphon* sp.

(14) ナガドロムシ科 Heteroceridae

種の同定は佐藤正孝氏にお願いした。

1. *Heterocerus fenestratus* THUNBERG, タテスジナガドロムシ
2. *Heterocerus asiaticus* NOMURA, ナガドロムシ

(15) ドロムシ科 Dryopidae

種の同定は佐藤正孝氏にお願いした。

1. *Elmomorphus brevicornis* SHARP, ムナビロツヤドロムシ

(16) ヒメドロムシ科 Elmidae

この種は我々で同定した。

1. *Ordobrevia foveicollis* SCHONFELDT, キスジミゾドロムシ

(13) マルハナノミ科

	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1									1				1
2			1										1
3											1		1

(14) ナガドロムシ科

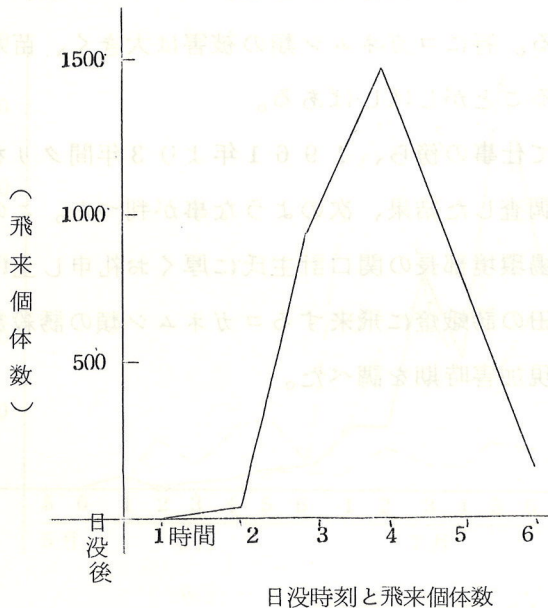
1									1				1
2										1			1

(15) ドロムシ科

1											1		1
---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	---

(16) ヒメドロムシ科

1								49	24	3309		1	3383
---	--	--	--	--	--	--	--	----	----	------	--	---	------



キスジミゾドロムシの時刻別飛来個体数

	VI 25	VII 17	VII 23	IX 10	計
7時	0	0	0	0	0
8時	0	0	0	0	0
9時	4	0	8	1	13
10時	30	21	1416	0	1467
11時	15	3	1441	0	1459
12時	—	—	444	—	444
計	49	24	3309	1	3383

(考 察)

マルハナノミ科・ナガドロムシ科・ドロムシ科はいずれも資料が非常に乏しいため、十分な考察は出来ないが、飛来時刻をみると、マルハナノミ科は7～8時に、ナガドロムシ科は10時に、ドロムシ科は8時に飛来している。

ヒメドロムシ科のキスジミゾドロムシは調査資料の概要 (Vol. 1, 1961 P9-P11) でも述べたように、6月下旬から7月下旬にかけて多数飛来している。飛来時刻は9時30分以後 (日没2時間後) に激増し、10時30分に最高値を示す。このような種はガムシ科の一部にもみられるが、いずれも水棲甲虫にみられることは興味ある問題である。 (野村)

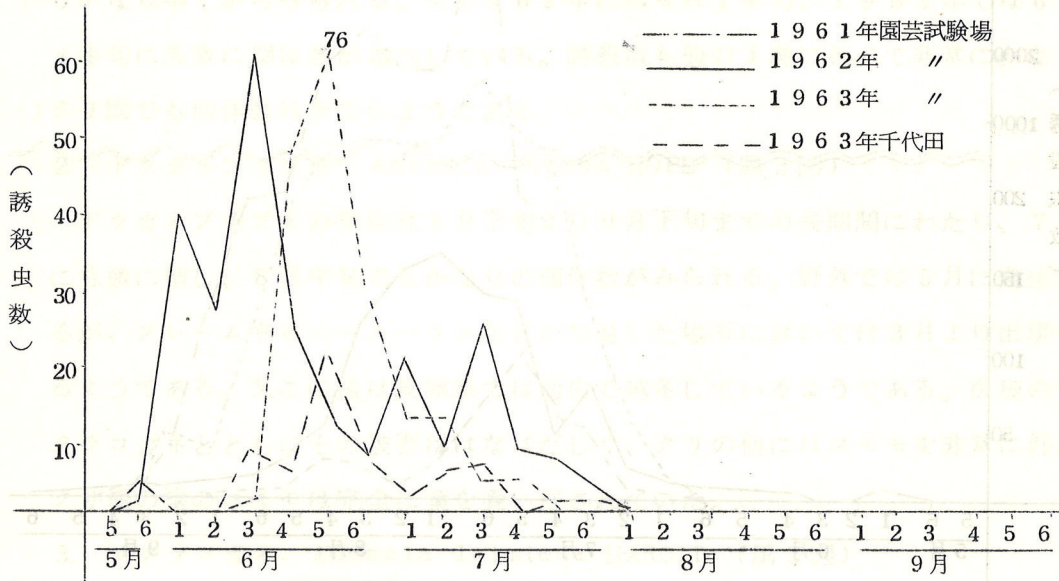
クリを加害するコガネムシ類の発生状況

木 村 裕

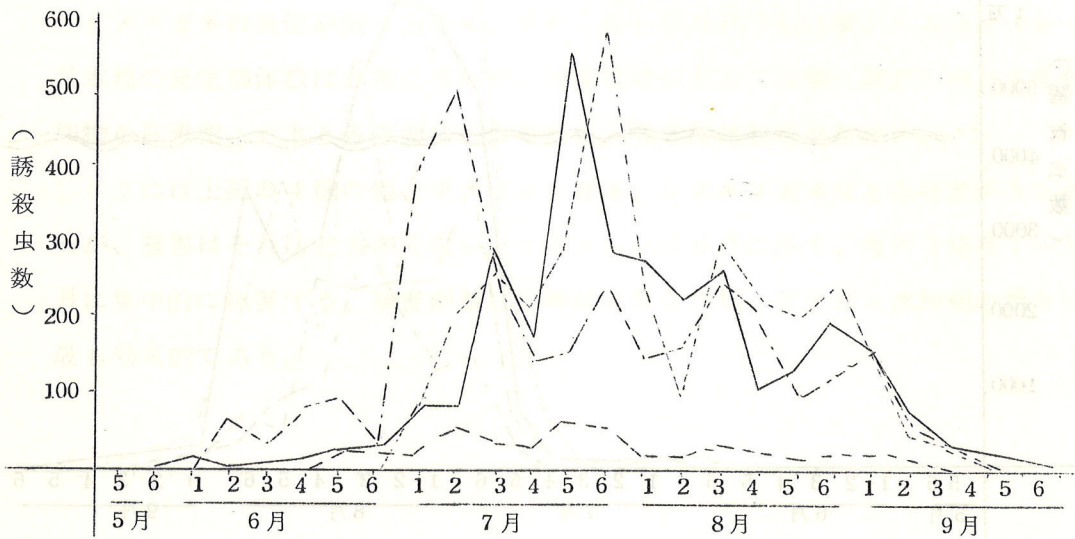
クリを加害する害虫には非常に多くの種が知られている。それらの中でモモノゴマダラノメイガ、ネスジキノカワガ、クリミガ等は果実を害し、フタモンマダラメイガ、キクイムシ類、カミキリムシ類は樹幹や枝部を、ハマキムシ類、コガネムシ類は葉部をそれぞれ加害する。特にコガネムシ類の被害は大きく、苗木はもちろん、成木でも丸坊主にされることがしばしばある。

筆者は茨城県園芸試験場において仕事の傍ら、1961年より3年間クリを加害するコガネムシ類の発生状況を調査した結果、次のような事が判つた。この報告にあたり色々お世話になつた当场環境部長の関口計主氏に厚くお礼申し上げる。

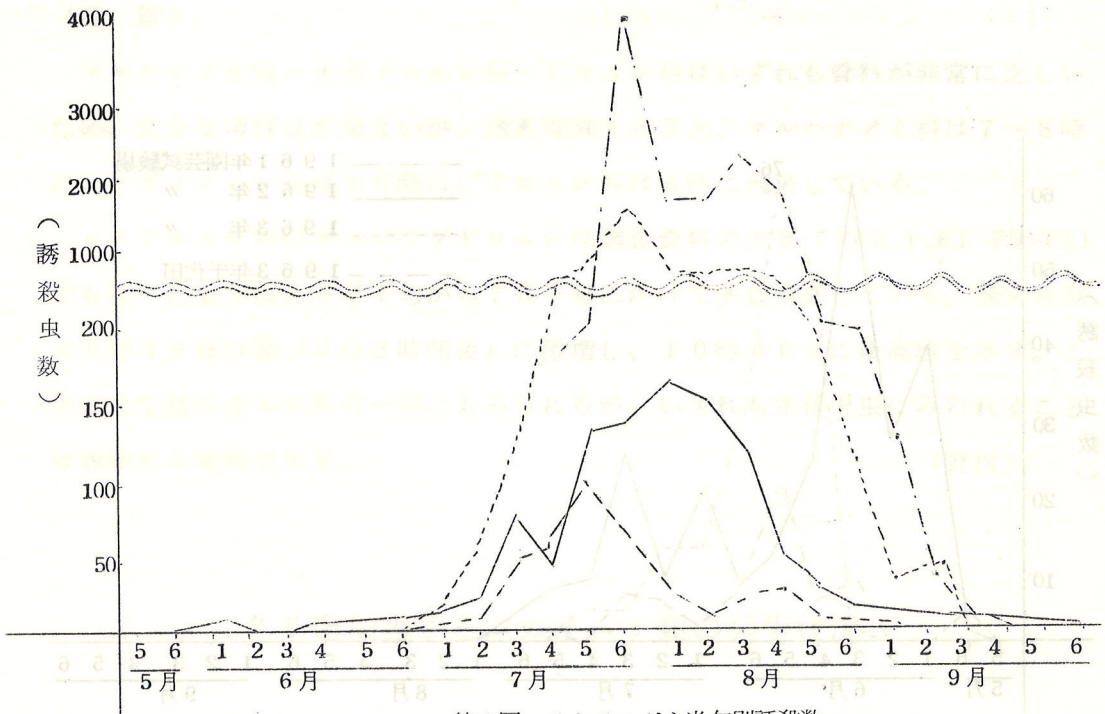
なお筆者は当試験場内及び千代田の誘蛾燈に飛来するコガネムシ類の誘殺数を記録することによってそれらの出現加害時期を調べた。



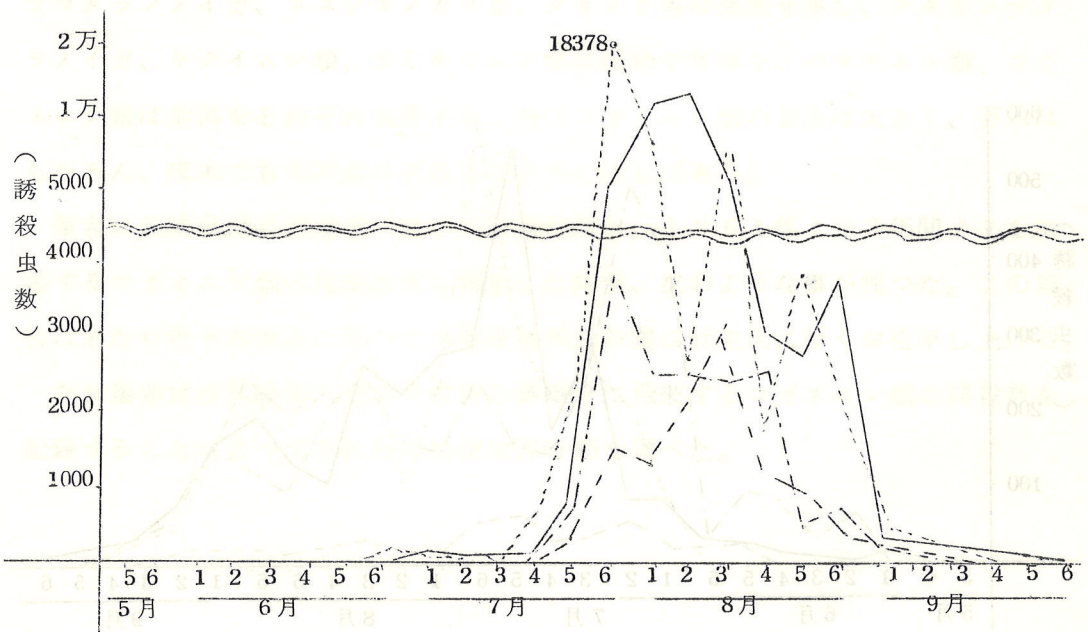
第1図 コガネムシ半旬別誘殺数



第2図 ドウガネブイブイ半旬別誘殺数



第3図 サクラコガネ半旬別誘殺数



第4図 ヒメコガネ半旬別誘殺数

1. コガネムシ *Mimela splendens* GYLLENHAL (第1図)

コガネムシの発生は5月下旬より7月下旬まで続き、他の3種のコガネムシよりかなり早くからみられる。又1962年には6月1半旬、1963年には6月4半旬に急激に個体数が増加している。誘殺数も他の3種に比べて非常に少なく、クリ園でも個体数は少ないようである。

2. ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* HOPE (第2図)

ドウガネブイブイの発生は5月下旬より9月下旬までの長期間にわたり、7月に急激に増し、8月中旬でもかなりの個体数がみられる。野外では5月に発生するが、フレームやビニールハウスなどの加温した場所においては3月より出現するようである。又この種は茨城県では幼虫で越冬しているようである。次種のサクラコガネとともにその被害ははなはだしく、クリの他にはスモモを非常に好み、クリ樹の横のスモモは完全に葉を食い尽されていた。

3. サクラコガネ *Anomala daimiana* HAROLD (第3図)

サクラコガネの発生は6月1半旬にみられるが、7月中旬より8月下旬までが最も多く、9月になると非常に少なくなる。その被害は7、8月に前種とともに甚大である。

4. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY (第4図)

ヒメコガネの発生期間は短かく、7月下旬より8月下旬に集中し出現している。又本種の発生個体数は非常に多いが、加害植物が大豆(非常に好む)のような農作物から果樹、林木と各方面にわたるため、前2種ほど目立たない。

クリには上記の4種の他、チャイロコガネ、コフキコガネなどの加害がみられるが、被害はそれほど大きくない。コガネムシは6月に多く、他の3種は7~8月に集中的に加害する。被害が著しい時はBHC粉剤、デナポン水和剤の散布が最も効果的である。

ゴミムシダマシの新しい分布資料 (1)

植 田 謙 一

1. *Platydema takeii* NAKANE, タケイキノゴミムシダマシ

本種は1948年群馬県沼田で採集された1頭で記載され、その他の採集例を聞かない。筆者は奈良県春日山においてキノコより本種を得たので記録しておく。

1♀, Kasuga, Nara Pref., Honshu, 8. VII. 1961, K. Ueda leg.

2. *Platydema nigropictum* NAKANE, ヒメオビキノゴミムシダマシ

原産地 和歌山県新宮, 奈良県春日山。

筆者はトカラ中之島産の本種を検する事ができたので報告する。

1ex., Nakanoshima, Tokara Is., 12. VII. 1961, Y. Hama leg.

3. *Platydema kurama* NAKANE, マルツヤキノゴミムシダマシ

近似種が多いので見過ごされ易い種である。分布として本州(近畿地方を中心とした地域)、九州(英彦山)が知られているが、筆者は本州、四国、九州の各地の標本を検し得たので、そのうちで新分布と考えられるものを報告する。

1♀, Mt. Turugi, Shikoku, 31. VIII. 1960, T. Shibata leg; 1♀, Mt. Tebako, Shikoku, 8. VII. 1962, K. Ueda; 1♀, Tatera, Tsushima, 31. VII. 1961, H. Konishi leg; 1♀, Miyanoura, Yakushima, 10. VII. 1961, K. Ueda leg.

編 集 後 記

陽春を浴び桜のつぼみもふくらむ今日、第2号の編集を終えました。木村、林両幹事から再三の催促があつたのですが、校務と雑用に追われ、それに台湾への採集旅行と、気持ばかり焦り、なかなか編集ははかどりませんでした。そんな日々、先輩諸氏からいただいた創刊号に対する暖かい助言と激励は非常に大きな励みとなり、ここに第2号を送り出せることは大きな喜びです。

今年の本会の三会員が台湾へ遠征し、又岩湧山の灯火採集に引きつづき、奈良での甲虫の生態観察を始めました。いずれ報文の掲載出来る日も近いと思います。今後ともよりよい会誌として発展させて、皆様の御期待にそえるよう頑張ります。

(編集責任者 野村記)

びいとりず VOL. 1 No. 2

昭和45年4月10日印刷・発行

編集者 木村 裕，林 靖彦，野村英世

発行者 大阪市阿倍野区松虫通1-8-10

野村英世方 大阪甲虫同好会

印刷所 尙文館工房

